



# ひらほく新聞

「ひらほく新聞」で検索！  
 ★ホームページ・ひらほくランド★  
<http://www.hirahoku.com/>  
 ☆バックナンバー含め「ひらほく新聞」を  
 閲覧・ダウンロード可能です！

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

追悼 日野原重明先生  
 啓動人、セージ、月刊「致知」より

どうか一度しかない  
 自分の時間、命を  
 どのように使うか  
 しっかり考えながら  
 生きていくことはいい

100歳を過ぎても現役の医師を続け、高齢者が活躍できる社会の在り方などについて提言を続けた文化勲章受章者の日野原重明さんが7月18日朝、呼吸不全のため、105歳で亡くなりました。同僚の方々からは日本の国宝と呼ばれ、東京の聖路加国際病院での名誉院長の他、5つの財団法人のトップを務められていた日野原先生。心からの敬意と感謝を表すとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。今月号は少しばかりですが、追悼特集とさせていただきます。

まずは、月刊愛読誌『致知』バックナンバーよりご紹介します。

2008年12月号特集

「心願に生きる」より

僕はいま人生において最も大切だと思ふことを、次の世代の人に伝えていく活動を続けていくんです。

僕の話聞いた若い人たちが何かを感じ取ってくれて、僕たちの頭を乗り越えて前進してくれたらいいな。

その1つとして僕は2年前から2週間に1回は小学校に出向いて、10歳の子どもを相手に45分間の授業をやっています。

最初に校歌を歌ってもらいます。前奏が始まると子どもたちの間に入って、僕がタクトを振るの。すると子どもたちは外から来た年配の先生が僕らの歌を指揮してくれたというので、心が一体になるんですね。

僕が一貫してテーマとしているのは「命の尊さ」です。難しい問題だからなかなか分からないけれどもね。でも「自分が生きていると思っている人は手を挙げてごらん」と言ったら、全員が挙げるんです。

「では命はどこにあるの」と質問すると、心臓に手を当てて「ここにありません」と答える子がいます。

僕は聴診器を渡して隣同士で心臓の音を聞いてもらって、このように話を続けるんです。

「心臓は確かに大切な臓器だけれども、これは頭や手足に血液を送るポンプであり、命ではない。命とは感じるもので、目には見えないんだ。君たちね。目には見えないけれども大切なものを考えてごらん。空気が見えるの？」

酸素は？風が見えるの？でもその空気があるから僕たちは生きている。このように本当に大切なものは目には見えないんだよ」と。

それから僕が言うのは「命はなぜ目に見えないか。それは命とは君たちが持っている時間だからなんだよ。死んでしまったら自分で使える時間もなくなってしまう。どうか一度しかない自分の時間、命をどのように使うかしっかり考えながら生きていってほしい。」

さらに言えば、その命を今度は自分以外の何かのために使うことを学んでほしい」ということです。

僕の授業を聞いた小学生からある時、手紙が届きました。手紙が届きましてね。

そこには「寿命という大きな空間の中に、自分の瞬間瞬間をどう入れるかが私たちの仕事ですね」と書かれていた。

10歳の子どもというのは、もう大人なんですよ。あらゆることをピンと感じる感性を持っているんです。僕自身のことを振り返っても、10歳の時におばあちゃんの死に接して、人間の死というものが分かりました。

帰国した日野原先生を、1000人を超す人たちからのお見舞いやお花が待っていた。その礼状に奥さまが書き添えられた。「いつの日か、いつこの場所かで、どなたかにこの受けました大きなお恵みの一部でもお返し出来ればと願っております」この言葉が日野原先生第二の人生の指針となった。

2012年4月号特集  
 総リードより

人生は順逆の連続という。順逆をこえるとは、順境にも逆境にも負けない自分を創るということである。日野原先生の100年の人生にも、順境逆境は繰り返されたろう。それをこえ、いまなお使命に生きておられるお姿には神々しさがある。

1970年、日航機よど号ハイジャック事件があった。日野原先生はその機中にいた。58歳だった。事件四日目、乗客は全員無事、韓国・金浦空港で解放された。靴底で大地を踏みしめると、「無事地上に生還した」の思いが膨らみ、これからの人生は与えられたもの、人のために生きよう、という決意に繋がっていったという。

「100歳はゴールではなく関所だよ」人生の順逆にはほえみを持って立ち向かわんとする姿が、この句に表れている。

■著書の2001年刊行『生きかた上手』より

今日一日を精一杯、激しく生きる

一瞬が連なって一日となり、一年となり、一生となるのです。きのうと同じように過ごした今日であって、きのうはきのうの一度

きり、今日も一度きりの今日なのです。これほどかけがえない今日を、失敗を恐れて無為に過ごすのは、あまりにもつたないではないありませんか。宇宙に向かって飛び立つロケットが、機体を切り離すたびに軌道を変えるように、人生の節目ごとに発想を変えて新しいことを始めてはどうでしょう。

すでに私の人生にも幾段もの節ができました。聖路加国際病院の再開発にあたって、常識をくつがえす1200億円もの壮大な計画を立てた10年前も、思えば一つの転換点でした。無謀なチャレンジとの声もありましたが、いま、手にしている成果は十分に大きいものがあります。

仕事の分野ばかりにとらわれることもありません。定年が間近、あるいは子育ても一段落というのなら、見知らぬ世界に飛び込むには、まさに好機です。この先の時間は自分のためにたっぷり使えます。5年後10年後に思わぬ才能がひとつと言わず花開くかもしれません。そんな期待に心踊らせながら、今日一日を精一杯、激しく生きようではありませんか。(おわり)

☆この書籍の素晴らしい内容は次号以降もご紹介していきます。と思っています。

心温まる書籍紹介ブログ  
『人の心に灯をともし』  
より毎月ご紹介します。

### 【人生の

### ピンチのときに

### 天使があらわれる】

みやぎ中央新聞・魂の編集長、水谷もりひと氏の心に響く言葉より：

32歳のその女性は実家に帰省するため、1歳の幼子連れて新幹線に乗った。自由席の車両に乗り込んだが、車内は満席だった。リュックを背負い、スーツケースを持ち、さらに子供を抱いていた。女性はデッキに座り込んだ。そんな彼女に「こっちにいらっしやい」と声をかけた女性がい

「娘が受けたご恩を少しお返しできた」と思った。

こんなエピソードもある。とある病院に入院していた70代の女性の話だ。ちょうど花見の時期だった。ある日、嫁に行ったお孫さんがひ孫を連れてお見舞いに来た。お孫さんの手には桜の枝が挿してある花瓶があった。自宅の庭に咲いていたのを少し切って持ってきたという。女性はベッドの上から花見をしながら、孫の優しい気持ちをしみじみと感じた。

次の日、病室に入ってきた若い看護師が、こんな頼みごとをした。「その桜を貸してくださいませんか？」

訳を聞くと、「ほかの部屋の患者さんにも見せてあげたいと思ひまして…」女性は「そうだ、この病院には私のほかにも桜の花を見られない人がたくさんいるんだ。それなのに自分だけが喜んで…恥ずかしい」

しばらくして看護師が戻ってきて言った。「皆さん、喜んでくれましたよ」同じフロアの病室を訪ねて、お一人お一人に花瓶の桜を見せて回ったそうだ。忙しさの間を縫ってこんな気配りをしてくれる看護師がいたことに、女性は胸が熱くなった。

中日新聞の愛知県内版で毎週日曜日に掲載されている人気コラム『ほろほろ通信』には、こんな心温まる話が掲載されている。「ほろほろ」とは、花びらや葉っぱ、そして涙が静かに零れ落ちる様のことをいうそうだ。たくさんの人たちの感動する話に出合ってきて、志賀内さん(執筆者)は「いい話の法則」を見つけた。

人が忘れられない感動の出合いをするとき、人間っていいなあって思うとき、それは決まってピンチに遭遇したときだ。人生のピンチのときに天使が現れるというのだ。

40代の男性にはこんな思い出がある。幼稚園の頃、母親を亡くし、父親と二人で暮らしていた。それを見かねた隣の奥さんが毎朝弁当を届けてくれるようになった。大人になつて父親からその話を聞いた。食費の代金を持つて行つても「主人と息子の弁当のついでに作っているだけだから」と絶対に受け取らなかつたという。

男性はこの話を投稿した。「あのときのお礼がしたい。ご健在だったら連絡してください」と書き添えた。

後日、「ほろほろ通信」を読みました。私のことだと思いました。あの子が立派に成長していること、お弁当のことを忘れないでいてくれたことを知って涙が溢れました」というお便りが志賀内さんのもとに届き、翌週の紙面に掲載された。

誰の人生にもピンチは訪れる。そして誰の人生にも天使が舞い降りる。こんな話が本当の「情」報なんだろうなあ。

『すごい“人たち”』(ごま書房新社)より  
どんなに感動するいい話を聞いても、それを知っているだけではダメだ。それを、感動して、どういう行動を起こすのかが問われている。誰かに恩を受けたら、その恩を返していく。その恩を直接にその人に返せないなら、誰か別の人に恩を送るといふ「恩送り」をしていくこと。

「多動力」は大人になるにつれ失われていく。しかし、肉体のトレーニングを欠かさなければ健康を維持できるように、未知なる刺激に接し続けていけば、3歳児のような「多動力」もキープできる。

つまり、今の時代に生きる僕たちは、マインド次第でいくらでも若返れる。新しいことに興味を失ってしまえば10代でも老人だし、新しい刺激を求め続けるのなら60歳でも若者だ。いつまでも目をキラキラさせて新しいことにワクワク、3歳児のような好奇心をもって生きていこう。

「多動力」は大人になるにつれ失われていく。しかし、肉体のトレーニングを欠かさなければ健康を維持できるように、未知なる刺激に接し続けていけば、3歳児のような「多動力」もキープできる。

つまり、今の時代に生きる僕たちは、マインド次第でいくらでも若返れる。新しいことに興味を失ってしまえば10代でも老人だし、新しい刺激を求め続けるのなら60歳でも若者だ。いつまでも目をキラキラさせて新しいことにワクワク、3歳児のような好奇心をもって生きていこう。

「多動力」は大人になるにつれ失われていく。しかし、肉体のトレーニングを欠かさなければ健康を維持できるように、未知なる刺激に接し続けていけば、3歳児のような「多動力」もキープできる。

「多動力」は大人になるにつれ失われていく。しかし、肉体のトレーニングを欠かさなければ健康を維持できるように、未知なる刺激に接し続けていけば、3歳児のような「多動力」もキープできる。

つまり、今の時代に生きる僕たちは、マインド次第でいくらでも若返れる。新しいことに興味を失ってしまえば10代でも老人だし、新しい刺激を求め続けるのなら60歳でも若者だ。いつまでも目をキラキラさせて新しいことにワクワク、3歳児のような好奇心をもって生きていこう。

「多動力」は大人になるにつれ失われていく。しかし、肉体のトレーニングを欠かさなければ健康を維持できるように、未知なる刺激に接し続けていけば、3歳児のような「多動力」もキープできる。

つまり、今の時代に生きる僕たちは、マインド次第でいくらでも若返れる。新しいことに興味を失ってしまえば10代でも老人だし、新しい刺激を求め続けるのなら60歳でも若者だ。いつまでも目をキラキラさせて新しいことにワクワク、3歳児のような好奇心をもって生きていこう。

「多動力」は大人になるにつれ失われていく。しかし、肉体のトレーニングを欠かさなければ健康を維持できるように、未知なる刺激に接し続けていけば、3歳児のような「多動力」もキープできる。

「多動力」は大人になるにつれ失われていく。しかし、肉体のトレーニングを欠かさなければ健康を維持できるように、未知なる刺激に接し続けていけば、3歳児のような「多動力」もキープできる。

つまり、今の時代に生きる僕たちは、マインド次第でいくらでも若返れる。新しいことに興味を失ってしまえば10代でも老人だし、新しい刺激を求め続けるのなら60歳でも若者だ。いつまでも目をキラキラさせて新しいことにワクワク、3歳児のような好奇心をもって生きていこう。

「多動力」は大人になるにつれ失われていく。しかし、肉体のトレーニングを欠かさなければ健康を維持できるように、未知なる刺激に接し続けていけば、3歳児のような「多動力」もキープできる。

つまり、今の時代に生きる僕たちは、マインド次第でいくらでも若返れる。新しいことに興味を失ってしまえば10代でも老人だし、新しい刺激を求め続けるのなら60歳でも若者だ。いつまでも目をキラキラさせて新しいことにワクワク、3歳児のような好奇心をもって生きていこう。

「多動力」は大人になるにつれ失われていく。しかし、肉体のトレーニングを欠かさなければ健康を維持できるように、未知なる刺激に接し続けていけば、3歳児のような「多動力」もキープできる。

## 編集後記

本年も記録的な自然災害が相次いでいます。かつて経験をしたことがないような自然の猛威は、今を生きる私たちに何を伝えてくれているのでしょうか。過去の教えをあらためて受け取り、今をいかに生きていくか、まさに学ぶべき時です。

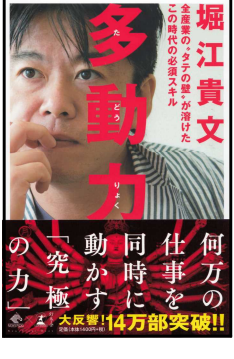
『今日、自分に起きている出来事は、過去に種をまいた(何かをおこした)結果である。』

公益財団法人修養団講師 寺岡賢さんの言葉です。『今を変えることで、過去も未来も変わっていく』胎内記憶研究の第一人者 池川明先生の言葉です。

以前、当紙面でも特集・ご紹介したところのある著名なお二人ですが、そのお話を聴くことができるとも貴重な機会があります。大切な仲間の主催する初コーポ講演会のご案内です。

池川明・寺岡賢  
横浜講演会  
2017年9月23日(土)  
場所：横浜市鶴見区公会堂  
ホール(JR鶴見駅西口そば)  
参加費：前売り大人3千円  
(当日4千円)  
小・中学生千円  
主催：やまどのこころ横浜  
http://kokucheese.com/  
event/index/466612/  
※詳細はひらほへサイトにて。

「多動力」は大人になるにつれ失われていく。しかし、肉体のトレーニングを欠かさなければ健康を維持できるように、未知なる刺激に接し続けていけば、3歳児のような「多動力」もキープできる。



## 『多動力』

堀江貴文著

◎久々にガツンと刺激を受けた書籍をご紹介します。